運命と数式に囚われた者

ステルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
運命と数式に囚われた者

【Ｎコード】
Ｎ１５６８Ｚ

【作者名】
ステルス

【あらすじ】
春の使い魔召喚でタバサが呼び出したのは、風竜ではなく人間だった！
『トモダチ』と一緒に来た彼がハルケギニアにもたらす波紋は一体……
これはもしＮがタバサに召喚されたら、というゼロ魔とポケモンのクロスオーバーです。Ｎはエンディング後。習作ですが、どうぞ宜しくお願いします。

序章　春の使い魔召喚

まず青年が知覚したのは、突き抜けるような青空だった。続いて、頬を撫でる草に、自分が草原の上に仰向けになって寝転がっている事を知る。

確か、さっきまではイッシュから遠く離れた地を『トモダチ』たちと歩いていたはずだ。

それから、空を引き裂いて現れた青と桃色の『トモダチ』たちが喧嘩を始めて……

そこまで思考すると、ずきりと頭が痛んだ。上半身を起こし、思わず頭に手をやる。何だろう？　すると、腰のモンスターボールが揺れた。『トモダチ』たちが心配してくれたらしい。

大丈夫だと声をかけると、青年は辺りを見渡した。

皆一様にマントを身につけ、手には形の整った棒を持っている。中には、身長ほどもある節くれだった杖を持つ者もあった。

「『雪風』のタバサが、召喚に失敗した！」

「人間が召喚されるなんて……」

「見たこと無い服。でも、マントも杖も無いし、平民じゃない？」

無遠慮に視線を投げかけ、ざわめく彼らを青年は意に介していなかった。それより、彼らの連れている生き物が青年の目を引く。

青年は『トモダチ』に詳しいが、あんな『トモダチ』は見たことがなかった。

モグリューに似ているもの、ヤミカラスに似ているもの、ハブネークに似ているものと、『似てはいる』ものの『違うトモダチ』だった。

青年は改めて自分のいた世界の狭さを知り、『見知らぬトモダチ』に話し掛けようとした所で目の前の少女に声をかけられた。

＊　＊　＊

『雪風』の二つ名で呼ばれている少女――タバサは、普段表情をあらわにしない彼女には珍しく呆然としていた。

偽名を使ったのが災いしたのか、サモン・サーヴァントで事もあろうに『人間』を呼び出してしまったのだ。

「『雪風』のタバサが、召喚に失敗した！」

誰かが叫ぶのを、遠くで聞いた。失敗。目の前に召喚された人がいるのだから厳密には失敗ではないが、誰からどう見ても失敗だった。

しかし、いつまでも呆けている訳にはいかない。タバサは、改めて目の前の青年を観察した。

彼は自身へと向けられる視線やざわめきを物ともせず、使い魔たちを物珍しそうに眺めている。歳の頃は１８ぐらいだろうか。彼か

ら漂うミステリアスで無邪気な雰囲気が、判断を鈍らせた。

あちこち盛大に跳ねた、腰ほどまである若草色の髪を後ろで束ねたさまは、狼や狐の尻尾を連想させる。その頭には前方にのみ大きなつばのついた不思議な帽子を被っていた。上半身には袖が七分丈のシャツを着ており、更に中に黒い八分丈の服を着ている。下半身は薄い焦げ茶のズボン。

見たことの無い服装だった。いや、シャツとズボンは平民の服装だが、袖が短かったり中に重ね着するなど、そんな着こなしをする平民はいなかった。

さらによく見ると、胸元には球状のペンダントに、両手首にはそれぞれ布製と金属製のブレスレット。腰には小さな箱がチェーンでくくりつけられていた。

ますます訳が分からない。もしや、ただの平民ではないのかもしれない。とにかくタバサは少年に声をかけてみることにした。

＊　＊　＊

「あなたは、誰？」

声をかけられて、そこで初めてタバサに気が付いたというように少年は彼女のほうへ向き直った。

自分より頭ひとつかそれ以上背の低い、小柄な少女。周りにいる人たちと同様に、マントと杖を所持していた。髪は短く切り揃えられ、それと同じ深い青をした瞳。整った顔立ちの少女は、眼鏡の奥からじっとこちらを見ていた。

「ねえ、キミには『トモダチ』はいないの？」

質問とは全く別の返答、いや、質問を質問で返された。しかも、初対面で何と失礼な問いだが、彼に悪気は無い。彼の言う『トモダチ』とは他と異なるからだ。

一瞬固まったタバサはすぐに立ち直り、そしてすぐに彼がそこらじゅうにいる使い魔を指差していることに気が付いた。

「私には、まだいない」

「ふうん」

自分から聞いたというのに、どうでもいいというような声色。タバサは気をとり直して再び尋ねた。

「あなたの名前は？」

すると青年は両手を広げ、今度こそ答えたのだった。

「僕の名前はN（エヌ）。N・ハルモニア・グロピウス」

序章　春の使い魔召喚（後書き）

はい、という訳で序章終了です。

当初ルイズに召喚させる予定でしたが、Ｎがガンダールヴというのが想像付かないというのと、ゼロ魔にはやっぱり才人がいてほしい、かと言ってキュルケやギーシュが召喚するのもイメージしづらい……という訳で、タバサに召喚してもらいました。

自己紹介は次回となりますが、もしプラズマ団全盛期の頃だったらＮの地位が凄まじい状態になってましたね……あくまで自己申告ですから

第一話　元王族たち

N・ハルモニア・グロピウス。目の前の青年は、そう名乗った。

タバサは記憶を手繰り寄せるも、『グロピウス領』というのは聞いたことがない。どうやら、目の前の『エヌ』という青年は貴族、ひいてはメイジではないらしかった。

ならば大丈夫であろうか。人間を使い魔にするなど聞いたことがないが、一度呼び出したモノは『主人』か『使い魔』が死なない限り変更がきかない。

呼び出した使い魔を殺してやりなおす、等も言語道断だ。目の前にいる『使い魔候補』が人間であるとかそういう以前に、『春の使い魔召喚』は神聖で、かつ自分の適性を見て将来を決めるイベントなのである。

呼び出しのは自分。責任はとらなければならない。そう、例え相手がずっと張り付いたような笑みを浮かべている怪しさ満点の『人間』でも。

「私の名前はタバサ。あなたに、私の使い魔になってほしい」

「使い魔？」

幼い子供のように小首を傾げるN。名乗った時もそうだったが、やけに早口だった。

タバサは他の生徒が召喚したサラマンダーやバシリスクをすっと

指差す。

「あれが使い魔。この『春の使い魔召喚』で召喚した生き物たち。召喚したら、契約を結んで使い魔になってもらう。私はあなたを召喚した。だから、私の使い魔になってほしい」

分かりやすく、簡潔にと言葉を選ぼうと話すタバサに、自分から問い掛けたにもかかわらず興味がないのか、Nは辺りをキョロキョロと見渡していた。

話を聞いていたか不安になるが、黙って返事を待つ。この青年が使い魔になったら、まずは人の話を聞くときは目を見るように教えよう、とタバサは密かに誓った。

一方のNは、使い魔になるかならないか、考えあぐねていた。一応話は聞いていたらしい。

Nは考える。『使い魔』を従える『人間』。まるで、『ポケモン』を従える『トレーナー』のようだ。唯一違う点は、ポケモンを何匹も捕まえ、モンスターボールに閉じ込めて『持ち運ぶ』のではなく、一人につき一匹で、野放しにしているところだ。

今までポケモンを残虐非道な人間から解放するのが生きる目標であり理由だった。そう教え込まれてきた。その『夢』は、ある一人のトレーナーによって挫かれたが。

人間は全員ポケモンを道具のように扱う訳ではなく、中には大切にし、向き合う人もいる。異なる考えを否定するのではなく、異なる考えを受け入れる。そう知り、自分自身を見つめ直すために旅に出た。

しばらくすると二体のポケモンの争いに巻き込まれ、気が付くと見知らぬ土地へ飛ばされていた。

そこで見付けた初めて見るポケモンに、自分自身も『ポケモン』にならないかという誘い。

これでまた一歩トモダチと、まだ見ぬ数式、世界の真理に近付けるかな。

彼はタバサに向き直ると、使い魔になる旨を承諾した。

＊　＊　＊

無事クラスメート全員がサモン・サーヴァント及びコントラクト・サーヴァントを終えたので、寮も兼ねている学校へと戻ることとなった。

「ガッコーってどこ？」

Nが尋ねると、タバサはすっと眼前の城を指差す。タバサと運悪く（今回の場合は『運良く』かもしれない）側にいた教師のコルベールにド級の爆弾が投下される数秒前のことだった。

「ふうん。ボクの城は家だけど、ここの城はガッコーっていうものなんだね」

――時が、凍った。

今、目の前の青年は何と言った？

ぼくのしろ。ボクノシロ。

改めて青年の服装を見る。豪華ではないが、質素、という訳でもない。が、上質な布で作られたとおぼしきそれは、おろしたてのようだった。身につけられている装飾品はよく磨き込まれていて、太陽の光を受け眩しい。

まさか……と思いつつ、コルベールがNの装飾品に負けず劣らず眩しい頭に汗をかきつつ慎重に言葉を選んでいると、さらに追い打ちをかけられた。

「あ、もう王様じゃないし、ボクの城じゃないのかな」

ああ、それ以前にこの間崩れたんだったとあっけらかんと述べるNに、『あなたの今後の処遇について学院長と話し合いの場を設けたい』という申し出がでたのは、ある意味当然だった。

＊　＊　＊

タバサは頭を抱えた。あの後の『話し合い』で、Nが途方もなく遠い所から来た元王候補らしく、しかし王権争いに破れ、放浪の旅をしている最中に召喚されたらしい、ということが発覚したからだ。

らしい、というのはNが『英雄』だの『トモダチ』だの『スウシキ』だの、彼は説明下手を通り越して聞き手に暗号解読をさせているように錯覚させるレベルだからだ。

意味を尋ねても、返ってくるのはこれまたわけのわからない答えばかり。しかも早口で。

これはひょっとしなくても、やっちゃったかもしれない。王族疑惑うんぬん抜きにして、だ。

自室へ向かう為に横を歩くNへ視線を向ける。悪意はなさそうだが、得体の知れない雰囲気を纏っていた。

入学当初、タバサにあてられた部屋に入る。既にNのぶんの家具は運び込まれていた。『暮らす部屋はタバサと同室』は、先程の話し合いで決められたことだった。

＊　＊　＊

着替えを済ませたタバサが尋ねる。

「『トモダチ』って何？」

漠然とだが、彼の言う『トモダチ』は、自分の知る『友達』ではない気がした。どこかあぶなっかしくて、つたない響きを伴っている。

「トモダチはトモダチだよ。ボクのトモダチ。至って単純で、その実複雑な数式」

「『スウシキ』？」

「この世の理。世界の全てを記号化した最も正確で美しいもの。ボクを解に導くもの」

そう言うとNはポケットからペンを取り出し、ごちゃごちゃ書き

出した――部屋の床に。

「ぎゃっ」

ごつん、と小気味よい音が響く。タバサの杖がNの頭に直撃したのだった。タバサの身長ほどもある節くれだった杖は、見るからに硬そうだ。

叩かれたNは心底驚いたようだった。

「どうして叩くの？」

ひどく、純粋な口調だった。

それは、と口を開きかけたタバサを無視して再び問う。

「ボクが『使い魔』だから？」

叩かれた箇所をおさえながら見上げるその瞳は口調同様に純粋で、同時に深淵のような昏さを孕んでいた。

「違う」

タバサは即座に否定した。否定しなければならない気がした。

「あなたが床に勝手に落書きしたから。悪いことをしたら注意する。これは当たり前」

「……悪いこと？」

「床に書いてもただの汚れ。文字を書くなら紙」

「今みたいに口頭で言えばいいじゃない。何で叩いたの？」

「スキンシップ」

「……叩くことが？」

「加減は必要」

そう言われるとNはうつむいた。何やら「対人関係を円滑に進める数式に新たな要素が……」だの、「ボクの腕力と今の衝撃から導き出される力量は……」だの、ぶつぶつ呟いている。

タバサはレビテーションを唱え、Nに紙と羽根ペン、それにインク壷を渡すと、ベッドへ潜り込んだ。

「あした床掃除。スウシキも明日」

「誰が？何で？」

「汚した人が綺麗にする。今日はもう寝るべき」

「分かった。紙とペン、アリガトウ」

そこまで聞くと、タバサは今度こそ毛布を被る。同じくNもベッドへ潜り込む音がした。

先程小さな子供を相手しているようだと思ったが、それは間違いではなかった。タバサより年上に見える彼は、精神的に未成熟で幼

い印象を受ける。それに、異常なまでに世間知らずだ。

――王権争いに敗れ、今は落ちぶれている。

自分とどこか似た境遇、これも始祖ブリミルの導きだろうか……

とにかく、明日から教えることが多そうだ。

タバサはそっと目を閉じた。

＊　＊　＊

タバサが寝息をたて始めてから三十分後。

彼女が確実に寝入ったのを確認すると、Nは深くベッドに潜った。

Nは注意深く服の中に手を入れては何かを取り出し、また手を入れては取り出し、という作業を何度か繰り返した後に毛布から頭を出し、一息ついた。少し新鮮な空気を吸ってから、再び熱気の篭った毛布の中へ潜り込む。

「ごめんね、今日一日じゅうボールに入れていた上に、ずっと服の中に入れてて」

内緒話をするかのように小声で話す彼の手の上には、計六つのボール。上半分が赤、下半分が白で、境界線には黒いラインと白い開閉スイッチがあるそれは、モンスターボールといった。

そのうちのいくつかがNの言葉に反応し、小さくカタカタ揺れた。同時に『大丈夫』という声が聞こえてくる。

Nは今日一日中浮かべていた張り付いたような笑みではなく、『本当の』笑みを浮かべた。

「ありがとう。それで、少し考えたんだけどね、ボクはまだここの『人間』を信用できないんだ」

相槌を打つようにボールがカタカタ動く。ひとつだけは、沈黙を守っていた。

「うん。この世界にはまだ見ぬ数式に溢れてる。ボクはそれを解き明かしたいんだ」

カタカタ。

「そう。この世界にキミタチと同じポケモンは居ないみたいなんだ。それに、同じ人間の中でも大きく優劣をつけている……」

カタカタ。

「うん。申し訳ないんだけど、そうしてくれると助かるな。今日はなんとか誤魔化せたけど、毎日ずっと閉じ込めてられないし」

ガタガタ！ガタガタ！

「……うん、心配してくれてありがとう。でも大丈夫。何かあったら呼ぶから。それに、彼には一緒にいてもらうよ。心苦しいけど、外に出せないから……」

カタカタカタ……

「……うん、分かった。ありがとう。キミは心配性だね。キミタチも何かあったらすぐ呼ぶんだよ」

カタカタ。

「うん。じゃあ、少しの間『サヨナラ』だね」

最後にNは笑うと、いくつかのボールを抱えてそろりとベッドを抜け出し、音をたてないように窓を開けた。

そして彼は窓から身を乗り出すと、森へ向かって力一杯ボールを投げた。

第一話　元王族たち（後書き）

今日もＮは絶好調です。電波的な意味で。
Ｎの台詞をＷｉｋｉで読んだのですが、初期のほうほど人の話を聞かないというか、自分の世界に入り浸ってる感じでしたね。どこかと交信してるみたいで正に電波。
七賢人曰く『Ｎは人の気持ちや心を理解する力はまだまだ未成育だった』らしいので、魔法学院の皆と一緒に成長出来たらそれはとっても嬉しいなって思ってしまうのでした。

第二話　回合する二人の使い魔

翌日。

朝食を摂る為に、Ｎはアルヴィーズの食堂――ではなく、食堂裏にある厨房のほうへ来ていた。

いくら元王族（と教師たちは思っている）とはいえ、はるか遠方すぎて誰も知らない国――曰くイッシュ国（グロピウス国の可能性あり）のプラズマ城とか――であるのと、今は一介の平民に貴族と同じ席に着かせると一悶着ある、しかし流石に席を用意しないのも問題があるので、結果Ｎは厨房でまかない食を貰うこととなった。

という訳で、今Ｎの前には柔らかく湯気をたてるシチューが置いてある。貴族に出す料理の余り物とはいえ、野菜がふんだんに使われたそれはとても食欲を刺激されるいい匂いがした。

スプーンで掬い、飲む様子はとてもさまになっていて元王族らしい気品が漂っていたが、彼の表情は始終氷のようだった。

＊　＊　＊

それぞれ食事を終え、合流したタバサとＮは、授業を行う教室へと向かった。

内装はさながら石でできた大学の講義室、というふうで、中に入るとぐっと注目を浴びる。

Ｎが『元王族』という噂が広まっているらしく、時折こちらを見

ながら生徒が囁き合っている。が、タバサは相変わらず無表情で席に向かい、Ｎもそんな彼らなどどこ吹く風、むしろ引き連れている使い魔に興味があるようで、子供のようにきょろきょろと見まわしてタバサの後に続いた。

タバサが席に着くと、Ｎもその横に座る。タバサは何もいわずに、本を開いた。

Ｎはまずどの使い魔に話し掛けようか、と色んな使い魔を目で追っていると、一匹の使い魔がこちらに近付いてきた。否、その使い魔は主人たる生徒についてきたのである意味おまけだが、Ｎにとっては人間のほうが『ついで』だった。

「おはよう、タバサ。あなた、本当に人間を召喚したのね」

褐色の肌に、燃えるような赤い髪。背は長身であるＮよりちょっと低いぐらいで、ボタンをひとつかふたつ外されたブラウスの下からははちきれんばかりの二つの果実が主張している。

青い髪に雪のような肌、小柄で背の低いタバサとは正反対な女の子だった。赤い髪の彼女は、艶めかしくＮに微笑みかける。

「初めまして、使い魔さん。わたしは『微熱』のキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ」

そう言うと自慢の長い髪をかきあげるキュルケ。その仕種はとても色っぽく、証拠に周囲の男子生徒の視線を釘付けにし、女子生徒からは嫉妬のまなざしを受けた。

しかしNは事もあろうに彼女を無視し、彼女の側にいる、虎ほどの大きさもある真っ赤なトカゲのほうを見ている。

『男はイチコロ』と自慢のキュルケは驚いたと同時に、心の奥に闘争心の炎がともった。へえ、このわたしを目の前にしてその態度、やるじゃない。

そんな彼女のほうを見ず、タバサは本をめくりながら一言「ダメ」と言った。正反対の二人は大親友で、お互いのことは熟知している。キュルケは冗談混じりにちょっと唇をとがらせた。

「ねえ、キミは何？」

きゅるきゅる、とトカゲが喉を鳴らすと、Nは相槌をうつように頷く。怪訝な顔をしたキュルケが視線を送る中、再び口を開いた。

「へえ、カリュウ山脈ってとこから来たサラマンダーっていう種族の、フレイムっていうんだ」

キュルケは目を丸くした。サラマンダーは尾にともす火の種類で住家が分かるが、名前などあてずっぽうで当たるはずもない。Nが続けた言葉に、キュルケは更に驚かされた。

「うん。ボクも使い魔。名前はN。……へえ、ボクの他にも人間の使い魔がいたの？今朝……ふうん、部屋が隣なんだ。興味？あんまり……」

キュルケとフレイムは、朝に『もう一人の』人間の使い魔と会っていた。それはいい。遠い遠い異国からここトリステイン魔法学院へ、たった昨日飛ばされたばかりなのに部屋割など知るはずもない。

だのに隣室と当てたこの青年、まるでサラマンダーと会話しているようで、キュルケはちょっとだけ興味が湧いた。タバサも本のページをめくる手が止まっている。

すっかりフレイムが懐いたようで、きゅるきゅると上機嫌にNと『会話』している。Nも、無邪気に言葉を交わしている。はたから見たら怪しさ満点の光景だった。

興味津々のキュルケがNに無視されたことも忘れて声をかけようとした時、教室が一瞬ざわめいた。続いて、クスクスと笑い声が聞こえる。

どうやら『もう一人の』人間の使い魔と、その主人が入室したようだ。

主人である桃色のブロンドを持つ少女は、愛らしい鳶色の目を不機嫌そうに歪めて席に着いた。後ろから着いてきた、ハルケギニアでは珍しい黒髪黒目の少年も同じように座ると、二言三言会話し、少年は床に座らせられた。

このやりとりを見れば分かるように、平民の扱いはよろしくない。Nが貴族でもないのに学院内で扱いがそこまでひどくないのは、『元王族』と教師たちが勘違いしてくれたからだ。

コミュニケーションにおいて重度の障害たりうる電波発言も、どこで役に立つか分からないものだ。因みに少年はあのあと椅子と机の間が狭かった為再び席に着いた。タフである。

キュルケが気をとりなおして質問しようとしたが、教師が入室してきた為断念し、フレイムと共に席へと戻っていった。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですわね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

教卓についた教師である中年女性が、満足そうに微笑みながら言う。人間を使い魔として呼び出した生徒のうち、タバサは涼しい顔をしていたが、桃色のブロンドの少女は俯いてしまった。

「今回は変わった使い魔を召喚した方もいるようですね」

シュヴルーズが二人の人間の使い魔を見てとぼけた声で言うと、教室がどっと湧いた。

「ゼロのルイズ！魔法ができないからって、その辺を歩いてる平民をつれてくるなよ！」

ルイズと呼ばれた少女はブロンドを揺らし、可愛らしい声で怒鳴る。

「違うわ！ちゃんと召喚したもの！こいつが来ちゃっただけよ！」

嘘つけ！と教室じゅうの生徒がゲラゲラ笑う。タバサも人間を召喚したにもかかわらずルイズだけ馬鹿にされるのは、『ゼロのルイズ』という二つ名の通り、ルイズは一度も簡単な魔法すら成功した試しが無かったからだった。

逆にタバサはトライアングルのメイジ。同じ学年でもトライアングルはキュルケしかいないところを見るに、相当優秀と言えよう。シュヴルーズもトライアングルだ。つまり、教師と同レベル。

常に魔法を失敗するルイズと、優秀なメイジであるタバサとでは、例え同じことをしても周囲の見方は違うのだった。

一方使い魔たちはというと、Nは主人と同じように我関せずといったような面持ちで、黒髪の少年はもう一人の人間の使い魔をきょろきょろと探した。

自分の元居た世界にもある帽子を被った姿を見付けると、授業が終わり次第声をかけようと決心した。『元王族』などの肩書きが存在しせず、『平民』として召喚されてから散々な扱いを受けていた少年は、その気持ちを分かち合う同胞が欲しかった。彼はもう一人の使い魔がそこそこの待遇を受けていることを知らない。

しばらくすると教室は静かになった。『土』系統のメイジである『赤土』シュヴルーズが、中でも特にうるさい生徒の口をぴたっと赤土の粘土で塞いだのであった。

あなたたちはそのまま授業を受けなさい、と苦い顔で言ったシュヴルーズは一度咳ばらいすると授業を再開した。

Nは、シュヴルーズの魔法に驚いた。何も、魔法を見たのは初めてではない。昨日、目の前でタバサが物を浮かせているのを見た。

しかし、昨日の魔法と今の魔法は違う。元からあった物をどうこうするのではなく、何も無い空間から粘土が現れたのだ。

空気中には見えない塵や埃が舞っているが、それをいくらかき集めたところで数人分の口を塞ぐ粘土とはなり得ない。まるで、等式なのに右辺を無視して左辺だけ好きなように足し引きしているようだった。

質量保存の法則を無視する『魔法』。きっと、まだまだあるに違いない。きっと、自分の想像なんて軽く凌駕するような。

Nは教師の言葉に耳を傾けつつ、新しい数式を前にひたすら思考に没頭した。

＊　＊　＊

突然、教卓が文字通り爆発した。

本当はしかるべき手順を踏んで爆発したのだが、いつの間にか思考の海に沈んでいたNにとってそれは突然だった。因みにしかるべき手順とは、ルイズが杖を構える、ルイズが呪文を唱える、だが。

教室は阿鼻叫喚の大混乱となった。生徒は悲鳴をあげ、ルイズに対する文句を叫んでいる。使い魔たちは火を吹いたり、窓を突き抜けたり、他の使い魔を食べたりと、ばたばた暴れた。騒ぎを収めるべきシュヴルーズは、爆発に巻き込まれて気絶している。

そんな中でも、いつの間にか本を読みだしているあたりタバサは大物だろう。Nは飲み込まれた使い魔が無事生還したのを見るとあとはどうでもよくなり、ルイズの爆発は不確定要素たりえるかまた思考の海へと沈んだ。この主人ありにして、この使い魔ありである。

＊　＊　＊

二時間後、目を覚ましたシュヴルーズは授業に復帰したが、その日は『錬金』の講義を行わなかった。どうやらトラウマになってしまったらしい。

罰としてめちゃくちゃになった教室の片付けを命令されたルイズたちは、昼休み前まで時間を費やした。

使い魔の少年、平賀才人は、食堂までの道中ひたすらルイズをからかった。召喚されてから何かと『平民のくせに』『使い魔だから』と言われ、寝床は藁、食事は床で硬いパンとほぼ具なしスープ。それにこれからは部屋の掃除に下着の洗濯など、現代日本人の才人の人間としての尊厳を大いに傷付けらるイベントが目白押しだった。というか、人間として見られていなかった。

身分格差が激しく、実生活においても科学技術に魔法がとってかわっているハルケギニアだから仕方ないとはいえ、才人にこれは堪えた。

しかし、異世界に召喚され、帰るアテの無い才人にとってハルケギニアで頼れる人は唯一ルイズだけだ。見捨てられたら遠い異世界で野垂れ死んでしまう。だから泣く泣く従っているのだった。

そんな鬱憤がたった一日で溜まりに溜まりまくっている才人は、高慢ちきなルイズの弱点を発見して浮かれすぎていた。誰からご飯を貰っているのか忘れるぐらい浮かれていた。

結果としてルイズをカンカンに怒らせ、昼食抜きの『お仕置き』を受けてしまった。そんな才人は今、食堂を出たあとお腹を空かしてふらふらと歩いていた。

「はあ、腹減った……」

嫌味を言ったことに後悔し始めているが、後悔先に立たず。ちょ

っぴり虚しくなってきた。

「どうなさいました？」

才人が振り向くと、大きな銀のトレイを持ったメイドの格好をした少女が心配そうにこちらを見ていた。黒髪で、そばかすのある素朴そうな子だ。

シエスタと名乗った少女は才人のお腹が悲痛な呻きを上げると、彼を厨房へと連れていった。

「ちょっと待っててくださいね」

才人を厨房の片隅にある椅子に座らせると、彼女は小走りで厨房の奥へと消えていった。

物珍しげに辺りを見回すと、同じテーブルのちょっと離れたところでシチューを食べる青年を見つけた。確か彼は、自分と同じ人間の使い魔のはずだ。

才人は青年の隣に移動した。若草色の髪は地球では見なかったが、七分丈のシャツや黒のタートルネックには見覚えがある。才人は嬉しくなって、声をかけた。

「なあ、あんたも人間の使い魔なんだろ？」

青年はぴたりと動きを止めると、才人のほうを見遣る。ここで初めて隣に座る存在に気が付いたようだった。

「うん。あんた『も』ってことは、キミも使い魔なんだよね？」

早口だが、貴族たちのような侮蔑の入り混じった声色ではない。それだけで才人は泣きそうだった。

「俺は平賀才人。あんたは？」

「ボクはN」

「えぬって、このN？」

才人がつつーっと机に指を走らせ、『N』の字を書くと青年は頷いた。文字も知ってるものだった。この人、地球人だ！名前がアルファベット一文字って、ちょっと変だけど！

才人がそう一人で感極まっていると、シエスタが銀のトレイにシチューを乗せてやってきた。Nと談笑する才人に一瞬驚いていたが、すぐにシチューを置く。

「貴族の方々にお出しする料理の余り物で作ったシチューです。よかったらどうぞ」

そのシチューは隣でNが食べているものと同じだった。とても美味しそうな匂いがする。

「いいの？」

思わず才人が尋ねると、賄い食ですけど……、と遠慮がちな返事が帰ってくる。

その優しさにホロリときながらシチューを一口すすると、ルイズのスープとは比べ物にならないぐらい美味しくて、泣けてきた。

「おいしいよ、これ。なあ、N」

隣に居たNに同意を求めると、少しシチューに視線を落とした後、「うん」と小さく頷いた。その様子に緊張していたシエスタが顔をほころばせる。

「よかった。お代わりもありますから、ごゆっくり」

才人は夢中になってシチューを食べた。余程お腹が空いていたのか、先に食べていたNより早く皿が空っぽになった。

「ご飯、貰えなかったんですか？」

そう尋ねてくるシエスタに、ゼロのルイズって言ったら皿を取り上げられた、と才人はこぼした。それに反応したのはNだった。

「キミがその人を馬鹿にしたからって、食事を抜かれたの？」

「！　ああ、あいつなんか俺のこと平気で暴力を振るったり、身の回りのこと全部やらせるくせに、ちょっとからかっただけで……」

実際才人は『ちょっと』では済まされないぐらいからかいまくったが、自身が受けた仕打ちがそれを上回っていたのでそのぐらいご愛嬌、と考えた。話を進めていくうちにNがどんどん真剣な顔になっていくので、才人は嬉しくなった。皆が才人がこき使われるのは当たり前としているから、この世界に来て初めて人間扱いされた気がした。

ある程度話が済むと、Nは何やらぶつぶつ言いながら考え込んで

しまった。「やはりグレーの世界は……」「どちらが不確定要素……」などと言っているが、愚痴を聞いてもらえた才人は気にならない。

才人は空の皿に気が付くと、それをシエスタに返した。

「おいしかったよ。ありがとう」

「よかった。お腹が空いたら、いつでも来てくださいな。私たちが食べているものでよかったら、お出ししますから」

「ありがと……」

嬉しい言葉にホロリときた才人は、そのまま静かに泣き出した。シエスタが驚く。才人は優しくされたことが嬉しかった旨を話し、シエスタの手伝いを申し出た。

最初は遠慮していたものの、結局シエスタは厚意に甘えることにした。最後に、才人はNが誰の使い魔か尋ねようとしたが、既に居なくなっていた。

＊　＊　＊

アルヴィーズの食堂で才人はデザートのケーキが乗った銀のトレイを持ち、シエスタがはさみでケーキをつまんで貴族の皿へ乗せていった。

その中で、金の巻き毛でフリルのついたシャツを着た少年がいた。名をギーシュと言い、キザったらしい奴だ。今の恋人が誰か、という話題で周囲の少年に冷やかされていた。

「なあギーシュ！　お前、今は誰とつきあっているんだよ！」

「つきあう？ぼくにそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

自分を薔薇に例えている、見てるこっちが恥ずかしくなるぐらい救いようのないキザだ。死んでくれ、と思いつつ、ケーキを配るシエスタの後に続く才人。すると、ギーシュのポケットから香水の壜がぽろっと落ちた。

声をかけても無視されるので、才人はトレイをシエスタに任せるとそれを拾ってギーシュの前に置いた。「自分のではない」と言いだすギーシュに疑問を持っていると、どうやら浮気していたらしい。

香水の壜でそれがばれ、一人の少女には頬を張られ、もう一人の少女にはワインをかけられた。

「あのレディたちは、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

などと芝居がかった仕草でのたまうギーシュに一生やってろ、と思った才人は、シエスタからトレイを受け取り歩きだした。

そんな才人を、ギーシュが呼び止める。

「待ちたまえ」

なんだよ、と才人が返事をすると、ギーシュはわざわざ椅子の上で体を回転させ、さっと足を組み替える。いちいちキザったらしい動きをしないと死んでしまうのか？　才人は頭痛を覚えた。

「きみが軽率に香水の壜なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

どうやら才人に責任転嫁しようとしているらしい。怒りというより、才人は呆れた。

「二股かけてるお前が悪い」

その言葉にギーシュの友人たちがどっと笑う。

「そのとおりだギーシュ！　お前が悪い！」

ギーシュの頬にさっと赤みが差した。彼はまだ言葉を続ける。

「いいかい？　ぼくはきみが香水の壜をテーブルに置いたとき、知らないフリをしたじゃないか。話を合わせるぐらいの機転があってもいいだろう？」

何があっても才人のせいにしたいらしい。そんなギーシュにまたもや正論で返すと、「平民に貴族の機転を期待したぼくが間違っていた」などと言われたものだから、才人はカチンときた。いくらハルケギニアで貴族が偉かろうと、キザなナルシストにそこまで言われると黙ってられない。そこで、つい余計な一言が口をついた。

「うるせえキザ野郎。一生薔薇でもしゃぶってろ」

この台詞にギーシュの目の色が変わった。ギーシュは立ち上がる。

「よかろう。君に礼儀を教えてやろう。丁度いい腹ごなしだ」

「おもしれえ」

才人も獰猛に歯を剥き出してうなる。第一印象から気に食わなかったし、ルイズほどじゃないけど可愛い女の子二人と付き合っていた。死刑である。

ギーシュは才人より背が高いがひょろひょろしていて、見るからに腕力はなさそうだった。才人もケンカが強いわけじゃないが、おぼっちゃまに負ける気はしなかった。

ギーシュは席を立つと、ヴェストリの広場で待っている、と言いこの場を去った。ギーシュの友人たちも、面白がってついていく。

シエスタはしばらくぶるぶる震えていたかと思うと、真っ青な顔で走り出してしまった。

入れ違いで、やりとりを見ていたらしいルイズに「謝りなさい」と注意される。しかし才人はもう決心していた。生きる為なら何だってしてやる。けど、下げたくない頭は絶対に下げないと。

「怪我じゃすまない」「平民はメイジに絶対勝てない」とルイズは必死に説き伏せようとしていたが、才人は話を聞かずに案内されるがまま広場へと向かってしまった。

＊　＊　＊

「ねえ」

歩いていると、何か引っ張られる感覚と共に急停止させられた。振り向くと、Nが右手で才人のパーカーの裾を掴んでいる。背の高

さと得体の知れない雰囲気が相まって才人は一瞬びっくりした。

「魔法使いに闘いを挑むって聞いたけど、本当？」

どうやら心配してくれているらしい。わざわざ探し出してくれていいやつだなあと才人はちょっぴり感動した。

「ああ。あんなヒョロすけなんざ一瞬で勝負を決めてやるよ！」

そう高らかに宣言する才人へ、Ｎは尋ねた。

「どうやって魔法を攻略するの？」

と。ここで才人は、相手がメイジだということを失念していたことに気が付いた。あっと声を上げるも、もう遅い。あの『赤土』の先生のように粘土を出現され、鼻と口を塞がれただけで才人はハイおしまい、なのだ。

冷や汗をかき始める才人に、Ｎはパーカーを掴んでいないほうの手を差し出した。その手にはあるものが握られている。

「……剣？」

「うん。借りてきた」

実際は学院内にある平民で構成されている衛兵の詰め所から無断で『トモダチ』にかっぱらってもらったのだが、返せば問題ないと思っているらしい。

才人は剣を受けとった瞬間、体が羽のように軽くなった。剣も、

腕の延長のようにしっくりくる。才人は驚いたと同時に、気が高ぶった。これならいける！

案内してくれている生徒から急かされたので、踵を返し広場へ向かおうとしたが、立ち止まってNに問い掛けた。

「なあ、何でちょっとばかし話しただけの、ほぼ初対面の俺の為にわざわざ用意してくれたんだ？」

もっともな問い掛けにNはちょっと考えた後、口を開いた。

「他の生き物を道具のように扱って、虐げる人間が嫌いだから、かな」

薄く微笑みながらそう言うNに才人は、昏い深淵から覗き込まれている錯覚を覚えた。

しかしそれも一瞬で、いつもの張り付いたような笑みに戻っているNに才人は面食らうものの、ヴェストリの広場へ向かって駆け出した。

第二話　回合する二人の使い魔（後書き）

という訳でようやく原作ゼロ魔の主人公コンビの登場です。

ルイズによる才人の扱いが、トレーナーに虐げられるポケモンのようでNは気になったようです。

それにしても回を重ねるごとに字数が増えていきますね。展開ごとに区切るのは勿論ですが、字数も考えていきたいです。

蛇足ですが、Nが貴族で、ルイズ風に名前を付けるとしたら
N・ナチュラル・ル・ハルモニア・ド・ラ・グロピウス
となるんでしょうかね。プラズマ国なら
N・ド・プラズマ
とか。名前談義って結構楽しいものですね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1568z/

運命と数式に囚われた者

2011年12月11日17時50分発行